

〔最終講義〕

日本のソ連史研究と私

富田 武

はじめに

最終講義の本題に入る前に、いくつかお話したいことがあります。まず第一に、この日を杉江徹先生とともに迎えたかったという思いです。先生は二〇〇一年一月に病気で他界されましたが、私と同じ一九四五年生まれ、本学への就職も一九八八年で同じでした。第二に、今年は私の恩師、溪内謙先生（ゆきうち けん）が亡くなられて一〇年、先生の最終講義を聴いて三〇年になります。その年に私が最終講義をすることに何かの縁を感じます。

続いてはイントロダクションとして、私がソ連史研究に入った動機、お世話になった先生方のことに言及します。私が東京大学教養学部に入学したのは一九六五年、アメリカの北ヴェトナム爆撃が始まり、反戦運動が盛り上がり、活動的な学生はマルクス主義の文献を読み、フルシチョフ失脚（一九六四年）後のソ連の保守化、社会主義建設をめぐる中ソ論争に関心を持っていました。私は菊地昌典先生の『歴史としてのスターリン時代』

を読んで大粛清そのものを、法学部に進学してからは溪内先生の『ソビエト政治史』を読んで、広くスターリン独裁の成立過程全体を研究したいと考えるようになりました。中ソ論争のように、また、日本の新旧左翼のようにマルクス、レーニンの教義の解釈論では歴史の真実は解明できないと思っただからです。

法学部では、他の分野の先生方からも多くを学びました。篠原一先生の第一作は『ドイツ革命史序説』ですが、これを教養の時期に読んでマルクス主義の階級闘争論ではなく、「エリート／サブ・エリート／大衆」という政治学の枠組みで革命現象が説明できることに感心した記憶があります。先生は後に「歴史政治学」を提唱され、東大定年退官後は本学文学部に移られ、直接にも接する機会が増えました。三年の時のゼミは三谷太一郎先生でした。バリバリの若手助教教授でしたが、最初のゼミを「日本の社会主義」で募集したところ、当時の活動家が集まってやや困惑された後に述べられました（ここにも当時のゼミ生だった同僚が二人います）。先生は退官後ほかならぬ本学法学部に移られ、私の日ソ関係史研究を知的に刺激し、助言されました。四年の時のゼミは坂本義和先生で、先生の鋭利な分析には敬服しましたが、私のソ連史研究に国際的契機が組み込まれているのも、西洋政治史の講義に「冷戦構造」などという用語が出てくるのも、先生の薫陶のおかげでした。ゼミは大学闘争で中止になり、先生と私の立場は分かれましたが、今日はその話は割愛します。

最後に「在野の研究者」石堂清倫先生です（一九〇四―二〇〇一）。先生は大正デモクラシーの時代、東大新人会から『無産者新聞』に入り、かの三・一五事件（一九二八年、共産党関係者の大量逮捕）で治安維持法違反により有罪判決を受けました。「偽装転向」して日本評論社に入り、やがて誘われて満鉄調査部に移り、日本よりはやや自由にソ連や中国を調査、分析しましたが、満鉄調査部事件（一九四三年）で再び治維法違反により獄に囚われました。

敗戦時は大連に四年ほど抑留され、帰国後日本共産党の理論面で貢献しましたが、一九六一年の離党後はグラムシ思想の紹介、ロイ・メドヴェージェフ『歴史の審判』（スターリン大粛清の克明な内部告発）の翻訳（『共産主義とは何か』）など、在野の研究者として活動されました。私は学生時代から先生の論文や翻訳は読んでいましたが、一九七〇年代後半から亡くなられるまで親しくお付き合いしました。『歴史の審判』は研究の出発点において重要な著作であり、私の日ソ関係史の中で、満鉄調査部やゾルゲ事件、日本共産党が大きなウエイトを占めているのも、先生から「後を託された」という思いがあつてのことでした。

一 日本のソ連史研究概観

さて本題に入りますが、ここではロシア革命から最近まで九十年余りの研究史を五つの時期に分けて振り返ります。ふだん聴かないような人物や史実が出てきますが、レジュメに沿って補足を加えながら説明するので、集中してください（この項では敬称略）。

1 戦前の研究

第一の時期は戦間期（一九二〇―三〇年代）で、ロシア革命、ソ連成立から間もない時期ゆえ、歴史研究というよりは同時代観察・分析が中心でした。活躍したのはジャーナリスト（新聞記者）で、黒田乙吉^{おしきち}、大庭柯公^{おおぼつかう}、中平亮、布施勝治、丸山政男、大竹博吉などが挙げられます。このうち黒田や大庭は帝政ロシア末期と革命そのものを観察しました（大庭は一九二二年から消息不明に、おそらくスパイ罪で処刑）。中平、布施はレーニンと会見し、布施はスターリンとも会見しています。彼らはモスクワ特派員としての取材経験に基づいて本も書きましたが、大竹『ソヴェ

ト・ロシアの実相を語る』（平凡社、一九三三年）、布施『ソ聯報告』（大阪毎日新聞社、一九三九年）などです。新聞報道は総じて「謎の赤色ロシア（赤露）」の実態を伝えるというもので、世界恐慌と第一次五カ年計画の頃は「計画経済」にやや好意的でしたが、日本で軍部が台頭し、ソ連で大粛清が始まると「不可解な国」「恐怖政治」イメージが支配的になっていきました。

ソ連研究の端緒を開いたのは満鉄調査部でした。南満州鉄道の調査機関は様々な経緯や名称変更がありました。日本の満洲支配と対ソ戦争準備の国策に適った機関です。ソ連や中国の文献・資料を集め、満洲の実態調査を行ったのですが、ソ連については経済、政治、軍事、民族等の調査・研究が行われ、月刊『ソウエート聯邦事情』を発行していました。もちろん、現地調査はできないので、ソ連の新聞や雑誌、亡命ロシア人から得た情報の分析が中心でしたが、世界的にも遜色のない水準でした。調査部の人材は語学やアナリストの能力を重視したので、逸材が揃っていました。マルクス主義的な分析も許容され、石堂のような有能な偽装転向者も抱えていました。このほか堀江邑一^{むらいち}、野々村一雄、溝端健三、平館利雄、大崎平八郎などがいて、彼らは戦後初期のソ連研究をリードすることになります。なお、大学はどうだったかと言いますと、語学・文学以外でロシア・ソ連研究者が職を得ることはできませんでした。天皇制国家で「赤の危険思想」を研究することが許されなかったのは、クロポトキンに言及した森戸辰男が東京大学を追われたこと一つをとっても明らかです。もちろん、大内兵衛、有沢広巳といったマルクス経済学者は東京大学等にいましたが、方法がマルクス主義であっても、対象がソ連経済ではなかったので許容されていたわけです（一九三七―三八年の人民戦線事件までは）。他方ロシア文学は、明治期の二葉亭四迷以来日本で人気があり、大正期には白樺派がトルストイの思想に好意的だったように、いわば例外的に市民権を得ていました。早稲田大学や東京外語

学校でロシア語、ロシア文学が講じられ、露和辞典で有名な八杉貞利は東京外語の教授、ドストエフスキーの翻訳で知られる米川正夫は陸軍大学の教授でした（国策上もロシア語教授は必要）。

2 戦後初期の研究

日本の敗戦と占領軍による「民主化」は、学問研究の様々な制約を除去し、知識人を中心にソ連と社会主義、日本共産党に対する共感や支持を生み出しました。ソ連は日ソ中立条約を破って対日戦争に参加し、関東軍将兵ら約六〇万人をシベリアに抑留し、南千島を占領、編入したのですが、当初は占領軍のプレスコードのため新聞がそれを報道することが禁じられていたのです。やがて一九四七年頃から抑留者が帰国し始め、抑留の苛酷な実態が明るみになり、四八年末頃から占領軍の政策が「逆コース」に転換し始めると、反ソ的な気分が高まってきました。それでも、日本共産党は四九年一月の総選挙で三五議席を獲得しました（四議席から躍進）。知識人の間では、戦前の無抵抗に対する「悔恨」に加え、「逆コース」に対する反発もあって親ソ・親共産党の気分が強かったのです。

ソ連研究者の団体としては、一九四六年五月に結成された「ソビエト研究者協会」があります。経済学者の堀江、親ソ的なジャーナリストで書店「ナウカ」を興した大竹らが中心でした。これと蔵原惟人、宮本顕治らから成る「日ソ文化連絡協会」が共同で発行した雑誌が『ソヴェト文化』です。同誌の記事は、占領軍に配慮しつつ、「ソヴェト民主主義」と計画経済、平等と生活の向上、大衆の文化を礼讃するもので、生活水準がそう高くはない点については後進国からの出発、第二次世界大戦の甚大な被害を挙げて弁護しました。肅清については、党員の定期的な点検による不良分子排除の点で「官僚主義」を防止するものだったという公式説明をなぞるだけで、それが国家権力の発動Ⅱテロルを伴ったことには口をつぐんでいました（よく言えば「知らなかった」のです）。対立候補のいない形ばかり

の選挙については、そういう形式より労働者、農民の代表が選ばれる結果の方が重要なのだと強弁するものでした。

ソ研には経済学者として、満鉄調査部出身の堀江、溝端、平舘、大崎のほか、飯田貫一（ハルビン学院）、的場徳造らが参加し、『ソヴェト文化』に寄稿していました。経済学としては本家の経済学の祖述（引き写し）にすぎず、大崎や的場のように農業問題を論じても、それは日本の農地改革の課題との関連でレーニンの先見性（「アメリカの道」か「プロイセンの道」か）やコルホーズの進歩性を説いたものでした。法学者としては、戦前九州大学から追いつ出された山之内一郎、その弟子筋の福島正夫（むしろ中国法）、藤田勇がいましたが（三人とも戦後は東大）、概して「ソヴェト法」の祖述であり、法律が「政治（独裁）の侍女」であることに無批判的でした。かなり多数の大学（一九四九年から新制大学）に「社会主義経済」や「社会主義法」の講座がおかれたのも、時代の雰囲気と彼らの活動がもたらしたものとと言えます。

見逃してはならないのは、福島、藤田、岡本博之（大阪高商教授）、尾上正男（ハルビン学院、ついで建国大学教授）のように、シベリア抑留の経験者がいた点です。前者三人は抑留中「民主運動」（旧軍隊の民主化、帰国後は日本の民主化をめざすソ連当局誘導の運動）に好意的か、積極的に参加したので、帰国後の研究がソ連擁護からスタートしたのは当然でしょう。尾上は、拙著でも詳しく書いたように、抑留中にソ連の捕虜待遇が国際法（ハーグ陸戦法規とジュネーブ条約）違反だということを言明し、帰国後も論文等に執筆した、しかし反ソ反共に凝り固まってはいない学者でした。

ソ研に批判的な学者、ジャーナリストはかなり遅れて、一九五二年三月（サンフランシスコ平和条約発効）日本独立の直前に「ソ連問題研究会」を結成し、『ソ連研究』を発刊しました。同誌には尾上や他の抑留体験者でソ連に

批判的な人々、先述の黒田や布施、八杉などが寄稿していましたが、とくに学術的な論考があったわけではない点では『ソヴェト文化』と同じでした。冷戦が亢進する中で、しかもソ連が情報閉鎖的であり続けたため、本格的な歴史実証研究はできず（ソ連は歴史情報も封印ないし歪曲）、左右いずれもイデオロギー的な主張でした。

ついでながら、左翼のソ連礼讃とイデオロギー過剰は人文・社会科学に限られた話ではなく、ルイセンコ学説（メンドル遺伝学批判）やミチューリン農法（穀物の春化处理による生産性向上）が日本でもてはやされ、民主主義科学者協会（民科）が学界で幅を利かせた時代だったのです。

3 スターリン批判とロシア史研究会

一九五六年二月ソ連共産党第二〇回大会の秘密報告で、フルシチョフがスターリンの大粛清と独ソ戦争開戦時の誤り（「侵攻近し」の情報を信用せず防衛態勢をとらなかつたこと）を批判し、スターリンを「偉大な指導者」「万国のプロレタリアートの父」の座から引きずり降ろしました。それはあくまで「レーニンに帰れ」の精神で、つまりソ連社会主義と共産党一党支配の枠組みの中での批判でしたが、それでも東欧諸国ではハンガリーをはじめとする改革運動、国内でも一連の改革を呼び起こし、さらにスターリン主義的な正統歴史学を揺るがしたのです。正統歴史学では大枠を説明する唯物史観⇨経済決定論と、事件（革命など）を説明する共産党（スターリン）中心史観が並存していたのですが、そのいずれもが批判的な検討の対象になりました。十月革命の正統性は前提でしたが、少なくとも農業集団化における大規模な強制⇨暴力が批判され（ダニロフ）、農民の共同体（ミール）やそれを擁護したナロードニキの見直しが始まりました。作家ソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィチの一日』（一九六二年）は、数百万の国民を迫害した「収容所群島」の証言として大きな衝撃を与えました。

日本では、まさしく秘密報告のその日に「ロシア史研究会」が結成されました（偶然の一致）。東大教養の「帝国主義と民族問題」の専門家、江口朴郎とその弟子筋の菊地昌典、倉持俊一、和田春樹ら、二十代のバリバリの若手が立ち上げたのです。菊地は農奴解放の研究を出発点とし、一〇年後には『歴史としてのスターリン時代』、大粛清研究で脚光を浴びました。和田は近代ロシア社会に関する諸論考で、スターリン主義的な「十月革命必然」論に疑義を呈し、ナロードニキ（のち社会革命党）のオルタナティヴ（選択可能性）を提示しました。和田はさらに西洋史出身らしく、ルフェーブルのフランス革命Ⅱ「複合革命」（貴族、ブルジョア、農民）説に倣ってロシア革命Ⅱ「複合革命」（労働者、兵士Ⅱ農民、諸民族）説を唱えました。これはプロレタリアートのヘゲモニー下の労農同盟による革命という正統派史観に対する挑戦に他なりません。

保田孝一は一九六〇年代後半に、ソ連におけるダニーロフらの研究に刺激されながら、ロシア革命後の共同体復活とネップ期における論争を取り上げ、林道義、雀部幸隆、肥前栄一らのウェーバー学者との論争を呼び、そこに和田をも巻き込みました。マルクスがヴェーラ・ザスリーチアて書簡で、ロシアでは資本主義を経ずに社会主義に至る可能性を平等原理の共同体が示していると記したことの解釈をめぐる議論に他なりません。それがフルシチョフ期のソ連における、発展途上国の「非資本主義的発展」の可能性をめぐる議論と通底していたこともたしかです。

見られるように、ロシア史研究会の議論が農業・農民問題に傾斜していた点は、ソ研ほどではないにしても、日本の後進性という講座派以来の認識を引きずっていたためであるとともに、ロシア革命におけるオルタナティヴという問題の立て方の帰結とも言えるでしょう。また、和田が正統派史観と同時に、「近代化」論（日本ではライシャワー・ロストウ路線として知られるが、ロシア史研究ではアメリカのブラック、西ドイツのラウエら）を批判しており、そ

れが結果的には日本の高度成長と社会の変化を過小評価することになったのではないかと思われます。スターリン批判直後に政治学者の松下圭一が「市民社会」論を提唱し、六〇年代後半には経済思想史の平田清明が『資本論』フランス語版の読み直しから「個体的所有」概念を発見し、これを核とする「市民社会」論を提示したとき、教条的な共産党系学者が反発したのは当然としても、多くの学者が必ずしも評価しなかったのは、今から思えば一種の知的怠慢に思われてなりません。

他方「社会主義経済学会」は共産党系学者が多く、スターリン批判後も、彼の「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」（一九五二年）や死後に編集された『経済学教科書』（一九五四年）を一種の聖典にしています。マルクスの労働価値説や再生産表式論はむろんのこと、恐慌必然論や窮乏化論（資本主義の発展は労働者階級の窮乏化を伴う）、世界認識としては「資本主義の全般的危機」論を特徴とするもので、社会主義経済については「資本主義に対する優位」「不断の生産性向上」「平等と福祉の向上」をほとんど疑いもしないものでした。彼らはスターリン批判をフルシチョフと同じ「個人崇拜」批判のレベルで理解し、他方では人工衛星スプートニク打ち上げと大陸間弾道弾発射実験の成功（一九五七年）で「社会主義の最終的勝利」を確信したのでしょう。

社会主義経済学会内部には佐藤経明、岩田昌征らソ連・東欧経済の現実に批判的な学者がいて、とくに佐藤はのちに『現代の社会主義経済』（一九七五年）で、東欧諸国の改革とブルスラの理論を踏まえて市場経済導入の不可避免性を説きましたが、ペレストロイカまで少数派に留まりました。ロシア史研究会の歴史研究と佐藤らの現状分析が連携しなかったことも、不幸だったと思われる。

なお、この時期「近代化」論をとるか、それに近い立場で、ロシア革命と社会主義に否定的な研究者は『月刊共産

「圏問題」に論考を発表していました。尾上のほかロシア思想史研究の猪木正道や勝田吉太郎、ソ連経済研究の気賀健三、加藤寛などで、この流れが後の「ソ連・東欧学会」に連なるものでした。米ソ冷戦によるイデオロギー対立は学問研究にも反映していたのです。

ここでロシア史研究会の初期十数年を総括しておきましょう。研究会はロシア革命の共同研究を積み重ねて、一九六八年に江口編『ロシア革命の研究』（中央公論社）を刊行しました。スターリン批判から十余年、ようやく「日本の歴史研究者の独自の主体性を示」そうとしたものです。江口の慎重な言い回しでは「ロシア革命の歴史が共産党史という角度からのみ書かれざるを得なかった」ソ連の革命史に対する批判的な論集をめざしたのですが、残念なことに二月革命はあっても十月革命の論文が欠落し、その後は一九一八年までという不備な革命史に終わりました。それも、藤田、木村英亮から和田、長尾久まで、共産党系から新左翼シンパまで、若手では二六歳の原暉之を含む執筆陣による研究会の到達点であり、当時の水準を示すものに変わりはありません。

4 ソビエト史研究会

一九七八年にロシア史研究会メンバーのうちソ連史を対象とする若手（当時三〇歳前後）が「ソビエト史研究会」を結成しました。呼びかけ人は奥田央、塩川伸明、下斗米伸夫、石井規衛、内田健二、小田博でしたが、要するに溪内謙の直系または傍系の弟子です。研究会は溪内と荒田洋の二人が顧問格で、一年遅れで参加した私も含めて「溪内シュール」とも言われました。溪内は行政学出身で、ソ連統治機構の研究を出発点とし、留学先でのE・H・カーとの出会いから政治史研究に沈潜した学者です。その学風は、政策分析を通して「権力と大衆（農民）」の関係、政治体制の構造を説明すること、史料を徹底的に読み解く（イデオロギー的表現の背後の現実を浮き彫りにする）ことに

真骨頂があります。

私たちはこの学風に魅かれ、弟子入りし、研究会に参加したのですが、別の共通背景もありました。一九六八年八月のチェコ軍事介入事件（ソ連への失望）、六〇年代末の大学闘争の挫折（そう表現するかは個人次第）、そしてソルジュニーツィン『収容所群島』（一九七四年翻訳）とロイ・メドヴェージェフ『歴史の審判』（一九七三―七四年翻訳）の衝撃がモチーフだったと言って差し支えないでしょう。一九七〇年代には六〇年代のイデオロギー論争の残滓がありました。それが、それとは距離を置いて溪内のように禁欲的に研究に専念し、史料の読解に集中することが肝腎だと思われたのです。

研究会は毎回（月一回程度）、報告が精緻な上、質疑応答も既成の研究をどれだけ消化し、どこがオリジナルなのか、史料の選択や読み方は妥当か、論点は適切か、今後の研究の見通しはどうか等、息詰まるような緊張感のもとで行われ、報告者にとってはむろん、参加者にも学ぶところが多いものでした。総じて八〇年代前半は溪内が助言、指導に当たり、ペレストロイカ以降は一九四五―四八年生まれの私たちが院生を助言、指導するといったように、ソ連史研究者の再生産の場として機能しました。

個々人の著作は別掲の通りで、とくに説明しませんが、研究会メンバーが一九二〇―三〇年代のソ連―農業・農民であれ、工業・労働者であれ、政治体制や社会政策であれ、外交であれ―ほぼ同じ時期を対象にしていたことから、切磋琢磨し合えたことはたしかです。研究会の充実ぶりは、『ネップからスターリン時代へ』『スターリン時代の国家と社会』『スターリン後のソ連社会』『ソ連農業の歴史と現在』『ロシア農村の革命―幻想と現実』『旧ソ連の民族問題』（木鐸社）と、一九八二年から九三年までの間に六冊もの論文集を出したことに示されています。とくに第二論集は、

ソ連の体制をどう規定するか、の議論を含み、ともすれば個別的な実証に籠りがちな研究会の方法論を豊かにするものでした。共産党を本来社会的なものとして国家権力との癒着を指摘する溪内の理念論ではなく、かつ全体主義論とも異なる「党Ⅱ国家体制」概念をめぐる石井、塩川、和田の論争のことです。

最後に、溪内退官記念の論文集『ソヴェト政治秩序の形成過程 一九二〇年代から三〇年代へ』の刊行（岩波書店）は「溪内シュール」の存在をアピールするものでした。

5 ペレストロイカ以降

ペレストロイカはソ連史研究に大きな刺激となりました。数十年に一度あるかないかの変革を目の前にして私たちは興奮し、ソビエト史研とは別に、塩川、下斗米、中村裕らの面々と「ペレストロイカ研究会」をつくり、新聞、雑誌を分担して読んで、興味深い記事、論文を報告し合う月例会を四年ほどやりました（本学が先行的に導入した衛星放送受信システムで、ソ連国営テレビ放送を視聴もしました）。私個人としても、フルシチョフ期のスターリン批判を大きく越える歴史見直しに驚嘆しながらフォロワーしたものです。

ソ連ではブハーリンやトロツキーが名誉回復され、農業集団化の恐るべき実態が明らかにされ、内戦期の赤色テロルやコサック潰しの事実（レーニンの命令）が浮上し、十月革命は正当だったのかという議論になりました。さらには、かつては欧米の支配的議論だったソ連Ⅱ全体主義論が登場し、十月革命Ⅱポリシェヴィキ・クーデタ説が生まれました。憲法制定会議を武力解散していなかったら、「同質社会主義政府」が成立していたら、さらには革命が二月で留っていたらと、オルタナティヴをめぐる議論は次々と廻り、遂にはストルイピン改革が成功していたら帝政は続き、ロシアは繁栄し、革命の悲劇や大動乱（スムータ）は起きなかったらという議論にまで至りました。

もとより、こうした議論は「状況の産物」であり、マスコミの「極端な報道」好みによるところが大であること、ゴルバチョフ政権が自分たちの都合に合わせて史料を「発見する」こと（公文書館は基本的にはアクセス不能）に批判的にならざるを得ませんでした。自ら公文書に当たりたいという強い希望は、予想もできなかった一九九一年八月クーデタの失敗から共産党の解散、ソ連国家自体の崩壊に至る一連のプロセスの結果、翌九二年三月からの在外（モスクワ）研修の機会に適えられたのです。

私は一〇カ月間ロシア現代史文書保存研究センター（旧共産党中央委員会公文書館、現ロシア国立社会政治史公文書館）に日参し、一九三〇年代の政治局会議事録や中央委員会総会議事録を修行僧の「写経」のように、粗悪なマイクロフィルムから筆写し続けました（マイクロリーダーも時代物でした）。その後も四年間ほどモスクワに一カ月ずつ通っては、初回にできたアーキヴィストとの友人関係を生かして便宜を図ってもらいながら、政治局会議「特別ファイル」やその他の文書を同様に筆写しました（コピーに制限あり）。その成果が私の第一作『スターリニズムの統治構造』です。

このかんモスクワではロシア人、アメリカ人など多くの研究者と知り合いになり、研究動向を学術雑誌情報に加えて肉付けすることができました。農業集団化研究の大家ダニローフ、イヴニツキーはむろん、工業化研究のデイヴィス（カーの弟子にして溪内の友人）、ブハーリン研究で有名なコーエン、政策決定メカニズム研究を同じくするフレヴェニューク、工業化と労働者を研究テーマとするコートキンと旧知の黒宮広昭（在米）、そして社会史研究の泰斗であるフィッツパトリックと彼女の弟子たち、ロシアの社会史の旗手とも言うべきズブコーヴァなどです。今は北海道大学スラヴ研究センターのウルフと知り合ったのも、モスクワの公文書館においてでした。

ロシア史研究会は、ソ連史プロパーではフレヴニューク、ズプコーヴァ、ロシア史では経済史のザハーロヴァ、社会史のブルダコーフらを年次大会のゲストに招き、日露の研究交流が進みました。彼らとのモスクワでの、また招待の形で東京での交流からも、全体主義論がひと頃の勢いを失い、研究の関心もテロルや政策決定から社会史・日常生活史、諸民族史に移りつつあることが分かりました。

ソ連崩壊後、日本のソ連史家（奥田、塩川、下斗米、梶川伸一ら）も次々と公文書館を訪れ、それぞれ新たに学術書を刊行しました。日ソ文化協定に基づく交換留学生制度の枠組みで大学院生の留学が一九八九年から始まりましたが、九〇年代末には彼らが公文書に基づく研究成果を学術書として刊行するようにもなりました（中嶋毅、松井康浩ら）。また、石井の『文明としてのソ連』や塩川の『ソ連とは何だったか』など、ソ連史全体を対象化する大きな議論が生れたのもソ連崩壊後の研究の特徴と言えます。私自身について言えば、第一の著作刊行後も公文書館通いを、学部長在任＋休養の時期（二〇〇二―二〇〇四年度）を除いて原則的に年二回（三月、九月）ずつ続け、日ソ関係に関する第二作、シベリア抑留に関する第三作を刊行しました。

冷戦終結後フランシス・フクヤマは「歴史の終焉」を唱えて一時期注目されましたが、私に言わせれば、終わったのは「イデオロギー化された歴史」であり、ソ連に対抗したアメリカの「全能の自由主義」史観も終わったのです。ソ連が崩壊して、公文書に基づく客観的な「歴史としてのソ連」研究が初めて成立したのですが、皮肉なことに、冷戦期だからこそ国策によって支援され、とくにアメリカで隆盛を極めたソ連研究は、冷戦終焉後担い手が減り、後継者が少なくなっています。それは西欧、日本でも基本的に同じ状況です。しかし、ナチズム研究が二二世紀に入っても意義を失わないように、スターリニズム研究、「文明としてのソ連」研究も継承されるべきでしょう。

二 私の研究

次の話題は私自身の研究ですが、書籍ゼロの修行期に簡単に触れてから三つの学術書ごとに述べていきます。私は、一九六九年の東大闘争収束から一〇年の研究プランクがあります。身分としては大学院生でしたが、各種の社会運動をやっていました。大学院博士過程はふつう五年までしかいられないはずでしたが、病気でもないのに事務方が親切で休学三年を足してくれ、修士課程二年を合わせると一〇年、大学が留年二年で六年ですから大学と大学院合計一六年のおそらく「最長不倒距離」レコードを保持している次第です。社会運動の話は、今日は割愛します。

1 修行期

その後某有名予備校の世界史の講師をしながら、主として東大の各図書館でマイクロフィルムと睨めっこし、時にはソビエト史研究会にも参加して研究をしてきました。余談を一つしておきますと、いま吉祥寺に本拠がある某予備校の「今でしょ」林先生が大人気ですが、私ははるかに及ばないものの、それなりの人気がありました。大学と違って受講生に授業評価をさせ、その結果で給与（時給）を上げ下げするのですから、否が応でも講義上手になりました。今日の講義を聴いている卒業生の中には、私の世界史授業を聴いた人がいるはずですよ。

さて、この修行期に、別掲のようにいくつかの論文を書きましたが、出発点は農業集団化の結果としての一九三二—三三年の大飢饉の研究です。ソ連崩壊後に公文書が開示され、ソ連政府の苛酷な穀物調達と飢餓輸出（欧米から機械類を買うための外貨獲得）の結果、五百万ともいわれる南部（ウクライナ、北コーカサス）の農民が餓死したことが判明していますが、当時は新聞や雑誌といった公刊史料を「眼光紙背に徹す」ように読むしか方法がありませんでした。

た。それでも断片的な収穫高の数字や「食糧難」「種まき用種子の不足」といった表現、国内旅券制の導入（農民を離村させない方策）から相当大規模な飢饉であることが分かりました（数少ない回想や外国人が入手した情報でも裏付けられました）。基本的に溪内史字の手法を実践した論文と言えます。

少し後に「スターリン憲法の制定過程」も書きました。農政史を続けても政治体制全体の構図が見えてこないところから、本格的な政治史への飛躍を試みたのです。基本的には『ブラウダ』（共産党機関紙）、『イズヴェスチヤ』（政府機関紙）、『トルード』（労働組合機関紙）、『コムソモリスカヤ・プラウダ』（青年同盟機関紙）のほか、主要都市（モスクワ、レニングラード）、主要地方（ウクライナ、北コーカサス、後コーカサス）の機関紙を虱つぶしに読んで、憲法草案に対する反対意見や急進的な後押し意見も紹介しつつ、議論（全人民討論形式）の全体像を浮き彫りにし、同時進行のモスクワ裁判との関係をも明らかにしたものです。スターリンが憲法改正をなぜ「民主化」と呼んだのかを、反ファシズム人民戦線との関係で説明し、ブハーリンが唱えた「リーチノスチの尊重」を欧米型人権論に限りなく近づいたものと評価しました。

この時期の仕事として重要だったのは、カーの最終作『コミンテルンとスペイン内戦』の翻訳です。ソ連外交とコミンテルンとの関係、コミンテルンの指導体系、スターリンがコミンテルンの政策決定にどの程度まで関与したのか、ソ連がスペイン人民戦線政府に派遣した軍事顧問や財政顧問の役割、内務人民委員部外国部の諜報・粛清活動などに関する知見を得、加えることができました。

2 『スターリニズムの統治構造』

スターリン体制の研究は長らく、ダニエルズのプロシア共産党党内闘争史、あるいはタツカーや菊地の粛清（テロル）

の政治史の域を出られませんでした。共産党政治局の時期ごとのメンバーは分かっても、会議はどの程度の頻度で開かれたのか、政治局員及び同候補の他に誰が出席したのか、誰が提案者で、どのような議論がなされたのか、会議ごとと如何なる決定がなされたのかが不明だったからに他なりません。フルシチョフはスターリンを批判して、政治局会議をめったに開かず「五人組」や「七人組」で問題を処理していたと述べましたが、その実態も知られていませんでした。

公文書の開示で政治局会議事録が読めるようになると、速記録ではないため議論の様子こそ分かりませんが、頻度や出席者、提案者、決定または先送り、あるいは「持ち回り審議で」決定という様々な処理の仕方が判明しました。政治局が指名した重要問題を処理する小委員会のメンバーも分かりました。さらに、歴史雑誌に連載された「スターリン執務室出入り記録」（誰がいつ入室して、いつ退室したか）から、誰がスターリンと最もよく接触したかという「側近度」が読み取れます。こうして政治局のコア・メンバー、外交文書に出てくる「インスタンツィヤ」が、一九三五年前後だとスターリン（党中央委員会書記長）、モロトフ（人民委員会議長兼首相）、カガノーヴィチ（党中央委員会書記）、ヴォロシロフ（国防人民委員）、オルジョニキツゼ（重工業人民委員）の五人であることを突き止めたのです（この点ではフレヴニユークと一致）。

しかも、スターリンら政治局員の個人文書が利用可能になり、また、スターリンとモロトフ、スターリンとモロトフ及びカガノーヴィチの往復電報集が公刊されたことにより、トロイカ（三人組）の相互関係や、スターリン独自の判断（外交政策ではソ連自らは提案せず、他国の提案を待つて動く等）があることも判明し、決定の動態的側面も明らかになってきました。同時に、口頭または電話による指示のように証拠が残らないものがあり、回想（モロ

トフにはインタビュー形式の回想記あり)で補うにしても限度があることが明らかになりました。

本書の第一の、最大の成果は右の政策決定過程の解明にあります。第二の成果は、世論形成・誘導のメカニズムを一九三六年憲法草案の全人民討議の報道、同じ頃のスペイン連帯(内戦における人民戦線政府支援)運動の報道を通じて明らかにした点です。この点では顕著な公文書の発見はなく、既存の二論文を修正して同じ第四章の二節に編集するに留めましたが、憲法草案討議過程に関しては、塩川から「世論」及び「民主化」概念が不明確で、ミスリーディングだ、スターリンの使う「民主化」は権力強化のための都合の良い道具に過ぎないのではないかという批判を受けました。私はこれに反論しましたが、その趣旨は、共産党が権力を独占していても大衆動員のために、党が誘導する「世論」は必要であり、喚起すれば想定外の反対意見も出てくること、「民主化」は一党支配を前提とし、欧米的な人権思想を導入するものでもないが、反ファシズム国際世論に合わせて強調した結果、ブハーリンの先述の人権論やごく少数ながら「信教の自由」「言論の自由」等の要求を生み出したこと(公文書で判明)をこそ注目すべきだというものでした。

ともあれ、本書は「一九三〇年代通史かつ研究の標準的テキスト」という評価を、あるロシア・ソ連史研究者からいただきましたが、二〇年代のように論争や情報が比較的公開されていた時期とは異なり、ソ連時代には機密扱いされていた公文書の利用、分析によってこそ得られた研究成果だと、密かに自負しております。

3 『戦間期の日ソ関係 一九一七—一九三七』

従来日ソ関係史としては、原暉之のシベリア出兵史などのテーマ別研究があるものの、通史的なものはありませんでした。日本史家はロシア語史料を読める者がほとんどおらず、わずかに酒井哲哉論文「日本外交におけるソ連観の

変遷（一九二三～三七）―日本外交史の枠組の再検討―（のち同『大正デモクラシー体制の崩壊 内政と外交』に収録）がある程度でしたが、ロシア語史料が部分的であり、あくまで日本外交のソ連観に限定されています。もちろん、通史といっても一九三七年の日中戦争開始と中ソ不可侵条約締結で終わっています。それは、同時期に始まる大粛清（テロル）が外交活動とその記録を大きく混乱させたので、公文書利用にいつそう慎重にならざるを得なかったからに他なりません。

本書はまた、従来の日ソ関係史が軍事的対立（ノモンハン戦争、日ソ戦争など）や国境紛争に重きを置き、これに不可侵条約をめぐるやり取りを加えた程度だった狭さを克服しようとしたものでした。露領漁業や北樺太石油利権、さらには中東鉄道売却をめぐる交渉など通商・経済関係にメスを入れ、さらには日本側では露領水産組合や対露輸出組合といった利益団体が対ソ政策決定に与えた影響を分析しました。日露協会は従来、会頭の後藤新平だけが有名でしたが、その経済活動（沿海州利権事業構想、右利益団体の後押し、ハルビン商品陳列館の活動）と文化交流への貢献（日露協会学校ハルビン学院による人材育成、日ソ文学・芸術交流）を明らかにしました。日ソ双方の情報活動については、ソ連側のゾルゲ事件と日本側の諜報活動は知られていましたが、ソ連側の諜報活動を系統的に分析し、さらに相手国の研究による日本像、ソ連像の形成の問題にも踏み込みました。

この著作では公文書はロシア（旧ソ連）と日本の双方を利用し、同一の出来事とその評価に関しては双方を比較して検証する作業も行いました。日本の外交文書は、外務省員外交史料館に通い、「アジア歴史資料センター」サイトが充実すると、そこからダウンロードして読みました。日ソ漁業交渉における利益団体として重要な露領水産組合の議事録は、函館市の図書館に出かけてコピーさせてもらいました。日露協会の後藤以外の役員が残したかも知れない関

連文書については、倉知鉄吉、田中清次郎（最有力幹事）、関根齊一（主事）の縁者を探したもの、見つからないか断られるかに終りました。しかし幸運にも、八杉貞利（幹事）の孫に当たる方から日記を拝借することができ、協会の実態が「アジ歴」掲載の公文書（年次総会の報告、警察の観察記録）と併せると、かなりの程度まで明らかになりました。日露協会学校、のちのハルビン学院についても「アジ歴」に公文書が掲載されており、関係者の回想と併せて、実態がかなり分かりました。ハルビン商品陳列館については、国会図書館に館報『露亜時報』が揃っていて、大いに助かりました。畑の違う分野での史料探しに苦労しましたが、ほぼそれに見合った収穫があったのです。

旧ソ連側の外交文書は、ロシア連邦外交政策公文書館に二〇〇五年から都合一〇回ほど出かけて、一九二五年国交回復から三十七年まで主として「日本ファイル」（ロシア語ではレフェレントウラ）中の公文書を閲覧しました。外務人民委員部（とくに極東担当の委員代理＝次官と極東部）の訓令や指示、駐日ソ連大使の本省への請訓や報告（日本情勢、大使館活動など）を片端から読みました。とくに大使の「業務日誌」は、日本の外務省幹部や政・財界の人物、時には軍人との接触の記録として貴重で、大使が日露協会名誉会頭の地位をも生かして対日外交工作（「軍部ファシスト」の穏健派による抑制を狙った働きかけ）をしていたことが明らかになりました。公文書開示以前には唯一と言ってよい史料集『ソ連の外交政策』に、例えばトロヤノフスキー大使が日露協会幹部の倉知や田中と頻繁に接触していたことは記録されていましたが、何を話し合い、大使はどういう情報を得ていたのが初めて、この「業務日誌」で判明したのです。駐ソ連日本大使は同様の活動ができなかったもので、一方に限られますが、訓令と請訓だけでは分からない日ソ外交関係の現場を目の当たりにした観がありました。

余談になりますが、日ソ漁業交渉をフォローしていたときに、いわゆる「田中上奏文」（ロシア語ではメモランダ

ム) 関連の文書を発見しました。一九二七年七月の東方会議後に田中義一首相兼外相が昭和天皇に上奏したと言われる文書で、ソ連時代の日ソ関係史では日本の大陸侵略政策の出発点だったと必ず言及されたものですが、日本史ではとうとう偽書であることが分かっていました。実は、一九三〇年一月六日付トロヤノフスキーのカラハーン(外務人民委員代理)あて報告は英文「田中メモランダム」を添付し、それが太平洋問題調査会京都会議で中国代表によって配布されたものの、内容の疑わしさを指摘されて回収されたと説明し、参考資料扱いしていたのです。この態度を大使自身が「満洲事変」勃発後に変更し、反日宣伝に利用することになりましたが、そのさい日本軍の満洲での行動は「田中メモランダム」の記述通りだったという自己瞞着が史実に代えられたというわけです。私はこの件を『歴史の諸問題』誌(二〇一〇年三月)にロシア語で投稿し、ソ連崩壊後のロシアでも一部に残る本物説に反駁し、良心的な研究者に支持されたことも付け加えておきます。

この著作のために利用した、もう一つの公文書館がロシア国立軍事公文書館です。ここでは主として合同国家保安部/内務人民委員部(一九三四年に前者を後者が吸収)外国部による軍事諜報活動の記録と極東赤軍諜報部による対日諜報活動の記録に当たりました。赤軍諜報機関による諜報活動としてはゾルゲが余りにも有名ですが、国家保安機関による諜報活動もこれに劣らず重要機密情報を入手していました。中でも驚嘆したのは、一九三一年から三四年にかけて駐ソ日本大使館武官を務めた笠原幸雄、河辺虎四郎の両中佐が合計八件の機密情報をソ連側に奪われたことです。従来、河辺(終戦時に陸軍参謀次長)の回想録では二件失うミスを犯したとだけ書かれ、こういう情報かも明かされてはいませんでしたから、八件とは驚きでした。

とくに、笠原の一九三二年三月二九日付参謀本部あて報告「日本の対ソ国防に関する判断」(早期の予防戦争を示

唆)は、翌三三年三月四日『イズヴェスチャ』論説に抜粋、引用されましたが、それまで誰の、いかなる文書からの引用だったのかが分からなかった私は、このとき初めて合点があったのです。ロシア人の研究によれば、盗まれた右報告はスターリンに届けられ、彼がその翻訳を注意深く、アンダーラインを引いて読み、他の政治局員に回覧した上で『イズヴェスチャ』論説に抜粋、利用させたとのことですが、三月四日、つまり満洲国建国直後という絶妙なタイミングもスターリンの判断だったに相違ありません。しかも、笠原が記事を見て驚き、四月七日参謀本部第二部(情報担当)長あて電報で「機密文書が開封検閲されているようだ」と報告したことまでキャッチしていました。なおかつ、笠原は対策をとらずさらに三件の情報を奪われ、おそらく、この件を引継がれなかった河辺も四件の情報を奪われたのですから、彼らの防諜活動のレベルの低さには啞然とします。

他方、日本側の諜報活動も、終戦時に参謀本部文書が焼却されたために、系統的な史料群を欠きますが、荒木貞夫文書、黒木親慶文書、真崎甚三郎文書や『対ソ情報戦資料』(栗屋健太郎編)、「アジ歴」、西原征夫のハルビン特務機関に関する回想的著作などを利用しました。

本書は、ソ連外交史の寺山から、ソ連による不可侵条約提議を過小評価してはいないか、中東鉄道買収における日本側現物払い輸出による財界救済という動機は過大評価ではないか、また、一部公文書の読み方に疑義があるという批判を受けました。妥当な批判もある一方、従来の狭義の外交史に囚われているようにも思えます。日本史サイドからは、本来日本史研究者がやるべきところまで踏み込んで分析したにもかかわらず、酒井による丁寧な紹介と高い評価(『日本歴史』二〇二一年二月)のほかは無視されたという印象を拭えませんでした。

4 『シベリア抑留者たちの戦後』

私は第二作を書き終えたとき、正直に言えば次のテーマでやや迷いました。しかし、シベリアに抑留された大伯父のこと、二〇〇九年に亡くなった内村剛介のことを想起し、シベリア抑留問題にとりかかる決心をしました。ロシア・ソ連史の研究者なら、富田がスターリニズム研究の次に日ソ関係史、その次は合流点としてのシベリア抑留を選択するのは当然だと思わうでしょう。スターリン体制の支柱には矯正労働収容所が含まれ、その矯正労働収容所の延長上に捕虜収容所があり、同じ内務人民委員部／内務省（一九四六年三月に名称変更）管轄下にあり、いわば双子のようなシステムだったからです。そして日ソ関係史や関東軍、極東ソ連軍の基礎知識があれば、私の場合一九三七年以降はやや弱くなるにしても、シベリア抑留問題に入りやすかったからです。

しかし、「あとがき」にも記したように、他ならぬ大伯父と内村のことは研究開始を躊躇させる要因でもあったのです。「日本帝国主義の大陸侵略の尖兵」としての関東軍将兵を研究するのは新左翼運動の洗礼を受けた者には抵抗がありましたし、スターリニズム研究の最先端をいていた私も「スターリン獄」を体験した内村には頭が上がりませんでした。この迷いが吹っ切れたのは、スターリン批判五〇年の二〇〇六年に『季刊 現代の理論』に書いた論文で述べたことを想起したからです。すなわち「日本人にとってスターリニズムとは何か」という問いを立てた場合の「日本人」は、最大三十数万程度の共産党員ではなく、シベリア抑留者六十数万とその家族、親族、友人を含めれば数百万から一千万台の人々であり、彼らが直接、間接に体験した事実の重さを受けとめて何かしら貢献するのが歴史家の使命、スターリニズム研究者の義務だと思いついたからに他なりません。

私の抑留研究は、(1)日本とロシアの既存の研究書及び史料集（露語）、多数の回想記及び『捕虜体験記』『戦後強制

抑留史」、戦後五年間ほどの抑留に関する新聞及び雑誌記事を読むことから始めました。(2)二〇一〇年三月からは引き続き年二回のペースで、モスクワ、イルクーツク及びハバロフスク、カラガンダ(カザフ共和国)に出かけて公文書館を利用し、墓地、埋葬地、日本人捕虜建造物を見学し、研究者と交流しました。モスクワの公文書館はロシア連邦国立公文書館、ロシア国立軍事公文書館、ロシア連邦外交政策公文書館、ロシア国立社会政治史公文書館といった馴染みのところでしたが、地方ではイルクーツク州、ハバロフスク地方の公文書館を初めて利用しました。(3)二〇一〇年一二月に立ち上げた「シベリア抑留研究会」では、研究の先達者(白井久也、阿部軍治)、抑留体験者や遺族・家族の話聴き、公文書調査の結果を発表する例会を三カ月に二回程度もってきました。(4)毎年八月二三日(スターリンによる抑留指令の日)に千鳥ヶ淵戦没者墓苑で開かれる「シベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集い」に参加し、抑留体験者が公の場で話すのを聴き、個人としてもインタヴューしました(本書の阿彦哲郎、高橋大造夫人等)。(5)こうした研究成果を公開し、旧ソ連から研究者を招いて意見を交換し、抑留体験者にも語ってもらうシンポジウムを二度開催しました。

最初は二〇一一年一〇月のロシア史研究会年次大会で、初めて抑留問題をパネルの一つで取り上げ、クズネツォーフ博士や抑留体験者の村山常雄らに報告してもらいました。パネル名は「戦後六六年シベリア抑留を問う―急がれる公文書開示と実態解明」で、その基調報告が私の執筆した「日米ソの公文書に見るシベリア抑留―研究の現状と課題」(『ロシア史研究』誌に掲載)でした。二〇一三年五月二七日―六月二日には、カラガンダ州ボラシヤーク大学から四名及びモスクワからカタソノヴァ博士を招待し、札幌で学術討論会「カラガンダにおける日本人抑留」(ロシア語使用)、東京でシンポジウム「シベリア抑留の実態解明へ―求められる国際交流と官民協力」を実現しました。同大

学が『カラガンダ州における日本人捕虜』を二〇一一年に出版して（カザフ／露／英語）、日本との交流を求めているからで、二二年九月にカタソノノヴァ及び富田を招待したことに對する返礼の意味もありました。シンポジウムの二〇一一年を上回る一七〇名超の参加者とNHKニュース報道にほくそ笑むとともに、日本人の研究はどうなっているのかという会場からの叱咤激励には「もう少しお待ち下さい」と心中で叫びました。実はこの頃、長勢了治『シベリア抑留全史』が出版を待つばかり（実際八月に出版）、拙著も原稿としては完成状態で、出版社を探しているところだったので。

長勢は私より早く抑留研究を始め、すでにロシア人の著作三冊を翻訳していました。『全史』は回想記を数多く読み、ロシア人の研究、ロシア語史料集を徹底的に消化、吸収してまとめあげた労作です。私も史料集の読み方が不十分だったことを、いくつか教えられました。私の『シベリア抑留者たちの戦後』は、抑留帰還者たちの運動や生活に關する研究書が長らく存在せず、わずかに長澤淑夫『シベリア抑留と戦後日本―帰還者たちの闘い』（二〇一一年）があるだけの現状を打開しようとしたものです。長澤が主として「全国抑留者補償協議会」の運動を取り上げたのに對し、拙著は文字通り帰還直後からの、冷戦下での激しい対立を伴った帰還者運動に真正面から挑んだものと言うことができます。対立の出発点としての抑留中の「民主運動」や、対立を増幅したソ連の送還政策については、ロシア公文書を駆使して分析しました。米国の防諜活動及び対抗宣伝を、GHQ文書や日本外務省文書を利用して分析した結果と併せると、帰還者たちが冷戦に翻弄された姿が浮かび上がります。

本書はおよそ、以下の内容から成っています。①抑留者たちの帰還の過程（ナホトカでの帰国準備から舞鶴下船まで、舞鶴での面接調査や尋問、家族たちの歓迎、故郷へ帰る途中の出来事）、②生活擁護と残留している仲間の帰還

促進を求める運動、③それが親ソ親日共勢力と反ソ保守勢力に分裂したこと、④それは対日理事会における抑留の遅れや抑留者数をめぐる米ソ対立と連動していたこと、⑤「逆コース」の中での保守派の攻勢が「徳田要請」問題をめぐる国会証人喚問の結果、若き哲学徒、菅季治の自死をもたらしたこと、⑥朝鮮戦争の勃発により共産党が非合法化され、同党系帰還者団体も壊滅したこと、⑦以後の帰還者運動は保守派の有田八郎（元外相）や民族派の末次一郎が指導権を握るところとなったこと、⑧サンフランシスコ講和の後は「戦犯」扱いされた長期抑留者の帰還が焦点になり、日ソ国交回復交渉の過程で順次帰還し、日ソ共同宣言の年の末に最後の帰還船が舞鶴に入港したこと、⑨しかし、同宣言の両国が相互に請求権を放棄するという規定が、抑留中の労働に対する支払いを拒む根拠となってしまったこと、⑩したがって、労働対価要求の運動は「抑留国補償」から「所属国補償」の原則に変えて「全抑協」によって再構築されるようになったことを明らかにしたものです。

日米ソの公文書、帰還者団体の機関紙や指導者の回想、共産党の機関紙・誌と内部文書、一般新聞及び雑誌記事、そして回想記とインタヴューを駆使して、当時を生き生きと再現することに成功したのか、抑留体験者が回顧して少しでも納得し、また、抑留の歴史を後世に伝える点で貢献したのか、その判断は読者の皆さんにお任せします。

三 社会主義について

日本のソ連史研究を回顧すると、それが社会主義観の変遷とリンクしていたことが分かります。戦後初期のソ連史研究（と言えるものがあるとして）はソ連社会主義の礼讃と一体でしたし、スターリン批判後は、少なくともロシア史研の中心的学者（和田ら）はソ連内部の改革派（ダニエロフら）に共感を寄せていました。ソビエト史研の有力メ

ンバーはもはや「現存社会主義」には関心を失い、イデオロギーから距離をとるようになりました。ペレストロイカは、ソ連史の見直しと社会主義の見直しが再び、しかし結果としては否定的な意味で一体化した時期でした。

1 社会主義の諸潮流

さて、ここでソ連社会主義を相対化するために、社会主義運動の歴史を簡単に振り返っておきます。まず一九世紀前半の初期（いわゆる空想的）社会主義は、後半にアナルコ・サンディカリズムと社会民主主義に分かれ、ロシア革命を契機に社会民主主義から共産主義が分離しました。共産主義（共産党）の潮流はレーニン、トロツキー、スターリンの誰であれ、ロシア革命をモデルと考え、社会民主主義（社会民主党）を敵視していました。コミンテルンの方針が示すように、統一戦線は社会民主党との協力ではなく、その影響下から労働者大衆を共産党に引き寄せる手段であり、議会もブルジョアジーの政府を人民に暴露する宣伝の場にすぎませんでした。

しかし、このような共産主義潮流の中に異端が生まれました。イタリアの共産主義者グラムシは、ロシア革命を「資本論に反する革命」（社会主義革命は先進資本主義国に起こるというマルクス理論に反した革命）と呼び、先進資本主義国ではロシア革命のような権力奪取、「電撃戦」は失敗する、なぜなら、ブルジョアジーの権力は「市民社会」の中から直ぐに再生するからだ、だから「市民社会」の中でプロレタリアートのヘゲモニーのもとに陣地を構築する「陣地戦」こそ社会主義への唯一の道であると主張しました。彼はしかし、イタリア・ファシスト政権に捕われ、一九三七年に獄死したため、その理論はコミンテルンには何の影響も与えませんでした。反ファシズム人民戦線の有力な推進者トリアッティに継承されました。

イタリア共産党は対ナチ・レジスタンスの主役だったため、戦後直ちに議会の有力政党になり、政権にも参加しま

した。トリアッティはこの経験を踏まえて「社会主義へのイタリアの道」を構想し、反独占民主主義のもとに議会多数派を結集しようと努めました。スターリン批判後はソ連共産党の指導的地位を否定し、「社会主義への平和的移行」（構造改革路線）を掲げたので、ソ連や中国の共産党から「修正主義」呼ばわりされました。それでも国内では保守的ブルジョア政権の中心キリスト教民主党に唯一対抗できる勢力を維持し、ベルリンゲル書記長のもとでは、キリスト教民主党の一部を引きつける「歴史的妥協」さえ提唱しました。国際的にはチェコ事件に抗議し、かつチリ反革命（アジエンデ人民戦線政府の軍部クーデタによる転覆）のような事態を避ける「ユーロ・コミュニズム」を掲げてフランス共産党、スペイン共産党と連携しました。

実は、ペレストロイカでゴルバチョフのブレインたちがめざした社会主義の自己改革の理論的道具の中に、グラムシとイタリア共産党起源のものがいくつか含まれていました。「国家的・官僚的社会主義の否定」（この点はユーゴスラヴィアと共通）、「市民社会」、「複数政党制」（前衛党の否定）がそれぞれですが、社会民主主義の再評価とこれへの接近も共通点でした。

2 ソ連崩壊の衝撃

ここにおられる池田嘉郎さん（東京大学）が本学を会場とする一昨年の歴史学会で、われわれロシア・ソ連史研究者はソ連崩壊にそれほどショックを受けなかった、すでにスターリン批判を経験したからだという趣旨の発言をされました。私には異論があり、この機会に述べることにします。スターリン批判は、ソ連国外では「個人崇拜」批判を超え、共産党を批判する新左翼を生み出したことは事実ですが、その新左翼もロシア革命は前提にして「あるべき社会主義」を求めていました。スターリン批判以降、ある者はユーゴスラヴィア「自主管理社会主義」を、別の者はハ

ンガリー、ポーランドの「市場社会主義」を、第三の者は中国の「人民公社共産主義」をモデル化しましたが、それらはことごとく失敗するか、機能不全に陥りました。ソ連の自己革新に期待する者もいましたが、フルシチョフ改革は失敗しました。ペレストロイカに最後の期待がかけられ、かく言う私も、一九九一年七月ソ連共産党中央委員会総会採択の新綱領草案を評して「新しい社会民主主義への転換」のチャンスと『世界週報』に書きましたが、八月クーデタ以降の過程は「社会主義の自己否定」に終わったのです。こうした経緯に鑑みれば、ソ連崩壊がショックでないとはとても言えません。しかも、ロシア革命は少なくとも当時の植民地及び従属国の解放に対する貢献という世界史的意義を有したのに、それまで清算されかねなかったからです。

ところで、ソ連崩壊に対する態度には三種類あったように思われます。保守派は「全体主義が崩壊するのは当然だ。むしろ遅すぎた」という反応でしたが、むろん彼らは「なぜ長持ちしたのか」を説明する気もありませんでした。第二は新旧左翼の一部で、何の思想的葛藤も、過去の自分に対する反省もなく「転向」しました。第三は教条左翼で、ソ連崩壊をスターリンの（人によってはレーニンやゴルバチョフもの）責任に帰して、マルクス主義自体は正しいと主張しました。日本では共産党系の学者の中に、ソ連は社会主義ではなく、実は国家資本主義だったのだとマルクス経済学で説明する者がいますが、「理論的説明」として貧弱な上、この「ソ連＝国家資本主義」論こそ、かつて彼らがトロツキストと罵ったラーヤ・ドゥナエフスカヤや対馬忠行が最初に唱えたことには口をつぐんでいるのです。

社会主義は歴史的経験としてはロシア・モデルの「国家社会主義」しか存在しなかったし、その改革はことごとく失敗したこと、マルクスやレーニンのユートピア（コミュニケーション国家）理念を対置してもはや説得力がなく、自己満足でしかないことを認めるべきだというのが私の立場です。もう少し敷衍すると、マルクス・レーニン主義は、政治

的にはプロレタリアート独裁、前衛党、党の民主集中制の三点セットに誤りがあります。たしかに、国家死滅論は「国家Ⅱ悪」とする点でロックらの西欧政治思想と相通するものがありますが、社会契約を階級闘争に置き換え（人権思想を否定し）、過渡的にせよ「プロ独裁」を必要としたために「リヴァイヤサン」（絶対主義のそれより巨大な全体主義的な）を生み出したと理解しなければなりません。経済的には生産力主義に誤りがありました。レーニン推奨のテラー・システム（資本主義工場時間Ⅱ工程管理）、スターリン提唱の「自然改造」（核爆発で河川の流れを変えることまで想定）は、マルクス主義に内在する生産力信仰、人間による自然（環境）支配の思想の発露に他ならないのです。

反対に、私が考える社会主義は、平等と公正（機械的平等ではない）、市民社会（NGOやNPOが政府と市場をコントロールできる社会）、「持続可能な経済」（経済発展と環境保全を両立させ、むしろ成長ゼロでも広井良典のいう「定常型社会」をめざすこと）、フェミニズム（ジェンダー・フリーの社会）、そして間接・直接民主主義（代議制民主主義＋対抗デモクラシー）を構成要素とする「新しい社会民主主義」です。

おわりに

以上のように、日本のソ連史研究はソ連と日本の時代の変化を反映し、私の研究もその一部であったことがお分かりでしょう。歴史とは「過去と現在との対話」であるとはカーの余りにも有名な言葉ですが、それは日本と私のソ連史研究にも当てはまります。

ここで「師を超える」ことについて言及しておこうと思います。どの学問でも恩師を超えることは、口で言う程た

やすいものではなく、私も溪内先生の圧倒的な影響のもとに長らくありました。私が先生から自立し始めたとき自覚したのは、一九九六年四月『思想』に（第一作の刊行前に）書いたトロツキー『裏切られた革命』再考の論文でした。私は、先生が新聞記事でしたか、ペレストロイカはトロツキー思想の復権を意味すると書かれたことに違和感を抱いていましたから、それを表明したとも言えます。だが真意は、この著作の意義と限界を説く形で、トロツキーへの傾斜（社会主義否定の風潮に対する危惧）のあまり、先生自身が歴史的文脈に置いて考え、論ずる方法論から逸脱してはいないかと批判する点にあったのです（そう明示的に表現はしませんでした）。この論文のためか、しばらく後に書いた一般向け解説「社会主義」のためかは定かではありませんが、先生はある直弟子に「富田君は社民だからな」と言われたそうです。この左翼の世界では侮辱的だったレッテルに対する私の内心の反応は「先生、それで何がいけないんですか」でしたが、皆さんはこれまでの説明で御理解いただけるでしょう。

もちろん、この件で私の先生に対する尊敬の念はいささかも揺るぎませんでした。二〇〇四年一月二九日、重態の先生を東大病院にお見舞いしたとき、ベッドの傍らに出版準備中の本のゲラが置かれていました。先生は二週間後に亡くなられ、著作は出版されましたが、この日のお姿、学問に対する真摯な態度を文字通り最期まで貫かれたことは決して忘れられません。私の教え子の皆さん、富田も先生と同じようにゲラを枕元に置いて永眠するかもしれないので、その節はよろしく願っています。

最後に、教育について一言述べます。私は西洋政治史、比較政治学、のち比較政治制度、最近は「戦後の日本と世界」などの講義と演習を担当してきました。この教育と自分の研究がどうリンクしているかについては、別紙の講義ノート『政治体制とその変動』概説―歴史政治学へのささやかな試み』をあとで御覧ください。いま大学教育につ

いてあれこれ言われ、文部科学省は授業回数に始まってシラバス充実などを行政指導で求めています。シラバスをいくら立派に書いても授業が下手ではどうしようありません。来年度からシラバスを回数ごとに詳しく、予習時間まで記せと書いてきていますが、それに何の意味があるのでしょうか。授業で重要なのはパッション（パトス）であり、伝えるべきメッセージだと私は信じ、やってきました。私の授業を受けた皆さん、そうではありませんか。

結びとして、成蹊学園と大学の教職員、学生、卒業生の皆さん、今日聴講に来てくださったロシア・ソ連史、他分野の研究者、抑留体験者・関係者ほかの皆さん、そして私事ながら妻と家族に感謝を表明します。長いこと、ありがとうございました。

*本稿は、最終講義では時間（八〇分）の都合で省いた箇所を復活し、加筆修正したのですが、話し言葉と「ですます」調は生かしました。主要な加筆修正は三冊の自著の説明ですが、内容要約ではなく、執筆動機や公文書の「発見」、研究史上の意義を中心に行いました。

【文献リスト】（富田は別紙業績目録）

- ① 野々村一雄（一九一三—一九九八）『ソヴェート経済論』勁草書房、一九五四年。
- ② 大崎平八郎（一九一九—二〇〇五）『ソヴェート農業政策史』有斐閣、一九六〇年。
- ③ 福島正夫（一九〇六—一九八九）『戦後のソ連社会』白日書院、一九四九年。
- ④ 猪木正道（一九一四—二〇一二）『ロシア革命史—社会思想史的研究』白日書院、一九四八年。
- ⑤ 尾上正男（一九〇五—一九九九）『ソビエト外交史』有信堂、一九五九年。
- ⑥ 藤田勇（一九二五—）『社会主義的所有と契約』東京大学出版会、一九五七年／『ソビエト法理論史研究』東京大学出版会、一九

- 六八年。
- ⑦ 岡稔(一九二四—一九七三)『ソヴィエト工業生産の分析』岩波書店、一九五六年。
- ⑧ 佐藤経明(一九二五—)『現代の社会主義経済』岩波新書、一九七五年。
- ⑨ 溪内謙(一九三二—二〇〇四)『ソビエト政治史』勁草書房、一九六二年／『ソビエト政治体制の成立』全四巻、岩波書店、一九七六—一九八六年。／『上からの革命—スターリン主義の源流』岩波書店、二〇〇四年。
- ⑩ 保田孝一(一九二九—二〇〇六)『ロシア革命とミール共同体』お茶の水書房、一九七一年。
- ⑪ 菊地昌典(一九三〇—一九九七年)『歴史としてのスターリン時代』盛田書店、一九六六年。
- ⑫ 和田春樹(一九三八—)『近代ロシア社会の発展構造』『社会科学研究』(東大社研)、一九六五年／『マルクス、エンゲルスと革命ロシア』勁草書房、一九七五年／『歴史としての社会主義』岩波新書、一九九二年。
- ⑬ 藤本和貴夫(一九三八—)『ソヴェト国家形成期の研究』一九一七—一九二二』ミネルヴァ書房、一九八七年。
- ⑭ 中山弘正(一九三八—)編『ネップ経済の研究』御茶の水書房、一九八〇年。
- ⑮ 木村英亮(一九三五—)『スターリン民族政策の研究』有信堂、一九九三年。
- ⑯ 原暉之(一九四三—)『シベリア出兵：革命と干渉一九二七—一九三二』筑摩書房、一九八九年／『インディギルカ号の悲劇』一九三〇年代のロシア極東』筑摩書房、一九九三年。
- ⑰ 辻義昌(一九四四—)『ロシア革命と労使関係の展開』一九一四—一九一七』御茶の水書房、一九八一年。
- ⑱ 奥田央(一九四七—)『ソヴェト経済政策史—市場と営業』東京大学出版会、一九七九年／『コルホーズの成立過程—ロシアにおける共同体の終焉』岩波書店、一九九〇年／『ヴォルガの革命—スターリン統治下の農村』東京大学出版会、一九九六年。
- ⑲ 下斗米伸夫(一九四八—)『ソビエト政治と労働組合』東京大学出版会、一九八二年／『スターリンと都市モスクワ』一九三一—一九三四年』岩波書店、一九九四年／『ソ連』党が所有した国家』一九二七—一九九二』講談社選書メチエ、二〇〇二年。
- ⑳ 塩川伸明(一九四八—)『社会主義国家』と労働者階級—ソヴェト企業における労働者統轄一九二九—一九三三年』岩波書店、一九八四年／『スターリン体制下の労働者階級—ソヴェト労働者の構成と状態一九二九—一九三三年』東京大学出版会、一九八五年／『ソヴェト社会政策史研究—ネップ・スターリン時代・ベレストロイカ』東京大学出版会、一九九一年／『ソ連とは何だったか』『社会主義とは何だったか』勁草書房、一九九四年／『現存した社会主義—リヴァイアサンの素顔』勁草書房、一九九九年。
- ㉑ 石井規衛(一九四八—)『文明としてのソ連—初期現代の終焉』山川出版社、一九九五年。
- 中井和夫(一九四八—)『ソヴェト民族政策史 ウクライナ一九一七—一九四五』御茶の水書房、一九八八年。

- ②③ 高橋清治（一九四九―）『民族の問題とベレストロイカ』平凡社、一九九〇年。
- ②④ 梶川伸一（一九四八―）『飢餓の革命 ロシア十月革命と農民』名古屋大学出版会、一九九七年／『ポリシエヴィキ権力と農民―戦時共産主義下の農村』ミネルヴァ書房、一九九八年／『幻想の革命 十月革命からネップへ』京都大学出版会、二〇〇四年。
- ②⑤ 中嶋毅（一九六〇―）『テクノクラートと革命権力―ソヴェト技術政策史一九一七―一九二九』岩波書店、一九九九年。
- ②⑥ 松井康浩（一九六〇―）『ソ連政治秩序と青年組織 コムソモールの実像と青年労働者の社会的相貌一九一七―一九二九年』九州大学出版会、一九九九年。